X線磁気円二色性による研究:FerTiS2との比較 X-ray magnetic circular dichroism study of iron-intercalated transition-metal dichalcogenide Fe_xTaS_2 with perpendicular magnetic anisotropy: Comparison with Fe_rTiS₂ 芝田悟朗^{1,2,3*}, Choongjae Won^{4,5}, Jaewook Kim⁶, 野中洋亮³, 池田啓祐³, 万宇軒³, 鈴木雅弘³,小出常晴⁷,田中新⁸, Sang-Wook Cheong^{4,5,6},齋藤智彦²,藤森淳^{3,9,10} 1日本原子力研究開発機構物質科学研究センター,〒679-5148 兵庫県佐用郡佐用町 1-1-1 2東京理科大学理学部第一部応用物理学科,〒125-8585東京都葛飾区新宿 6-3-1 3 東京大学大学院理学系研究科物理学専攻,〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 ⁴ Max Planck POSTECH/Korea Research Initiative, Pohang University of Science and Technology, Pohang 37673, Korea ⁵Laboratory of Pohang Emergent Materials, Pohang Accelerator Laboratory Pohang 37673, Korea ⁶Department of Physics and Astronomy, Rutgers University, Piscataway, New Jersey 08901, USA Laboratory of Pohang Emergent 7高エネルギー加速器研究機構物質構造科学研究所,〒305-0801 茨城県つくば市大穂 1-1 8広島大学大学院先端物質科学研究科,〒739-8530 東広島市鏡山一丁目 3-1 ⁹National Synchrotron Radiation Research Center, Hsinchu 30076, Taiwan ¹⁰Department of Physics and Center for Quantum Technology, National Tsing Hua University, Hsinchu 30013, Taiwan Goro Shibata^{1,2,3*}, Choongjae Won^{4,5}, Jaewook Kim⁶, Yosuke Nonaka³, Keisuke Ikeda³,

垂直磁気異方性を示す鉄挿入遷移金属ダイカルコゲナイド Fe_xTaS₂の

Yuxuan Wan³, Masahiro Suzuki³, Tsuneharu Koide⁷, Arata Tanaka⁸, Sang-Wook Cheong^{4,5,6}, Tomohiko Saitoh², and Atsushi Fujimori^{3,9,10}

¹Materials Sciences Research Center, Japan Atomic Energy Agency, Sayo, Hyogo 679-5148, Japan
 ² Department of Applied Physics, Tokyo University of Science, Katsushika, Tokyo 125-8585, Japan
 ³Department of Physics, University of Tokyo, Bunkyo, Tokyo 113-0033, Japan

⁴ Max Planck POSTECH/Korea Research Initiative, Pohang University of Science and Technology, Pohang 37673, Korea

⁵Laboratory of Pohang Emergent Materials, Pohang Accelerator Laboratory Pohang 37673, Korea ⁶Department of Physics and Astronomy, Rutgers University, Piscataway, New Jersey 08901, USA ⁷Institute of Materials Structure Science, High Energy Accelerator Research Organization, Tsukuba, Ibaraki 305-0801, Japan

⁸Department of Quantum Matter, Hiroshima Univ. Higashi-Hiroshima, Hiroshima 739-8530, Japan ⁹National Synchrotron Radiation Research Center, Hsinchu 30076, Taiwan

¹⁰Department of Physics and Center for Quantum Technology, National Tsing Hua University, Hsinchu 30013, Taiwan

1 <u>はじめに</u>

3d遷移金属元素Mを層間にインターカレートした 遷移金属ダイカルコゲナイド M_xXS_2 は、遷移金属元 素MおよびXの種類、さらにそれらのドープ量に依 存して、多彩な電気伝導および磁性を示す。特にFe をインターカレートした化合物 Fe_xTiS_2 および Fe_xTaS_2は、巨大な保磁力および垂直磁気異方性を示 す強磁性体になることが知られている[1,2]。このよ うな強い磁気異方性は、結晶構造が 2 次元的である こと、すなわち面直方向と面内方向との間で結晶構 造に大きな異方性を持つことが原因であると予想さ れる。我々は以前、Fe_xTiS₂ についての XMCD 実験 の結果から、Fe²⁺の凍結していない軌道磁気モーメ ント(*M*orb)が結晶場の 1 次摂動によって直接磁気異方 性エネルギーを生むことを明らかにした[3,4]。今回、 Fe_xTiS₂ よりもさらに強い磁気異方性を示す遷移金属

BL-16A/2019G622, 2021G668

ダイカルコゲナイド Fe_xTaS₂ について同様に XMCD 実験を行い、磁気異方性の強さが何によって左右さ れているかを探ることを試みた。

2 <u>実験</u>

Chemical vapor deposition (CVD) 法で作製した単結 晶 Fe_xTaS₂ ($x \sim 0.3$) 試料を、真空チャンバー内で劈開 することにより測定を行った。XMCD 測定は KEK-PF BL-16A に設置されている 5T 超伝導マグネット XMCD 装置を用いて行い、面直磁場配置および面内 磁場配置の両方で測定を行った。面内磁場配置は試 料を 60° 傾けた状態で測定した。測定温度は T = 30K,最大磁場強度は $\mu_0 H = 5$ Tであった。

3 結果および考察

Figure 1(a), 1(b)に Fe L_{2,3} 端で測定した Fe_xTaS₂の XAS および XMCD スペクトルを赤線で示す。これ らのスペクトルは面直磁場配置で得られたものであ る。XAS スペクトルは典型的な Fe²⁺の形状であり、 Fe_xTiS₂の場合[3,4]と同様にインターカレートされた Fe 原子からホストの TaS₂層へ電子がドープされてい ることがわかる。一方、XMCD スペクトルのスペク トル形状は Fe_xTiS₂のそれ[3,4]とは大きく異なる。具 体的には、Fig. 1(b)中の丸印に示すピーク構造は Fe_xTiS₂では観測されていない、Fe_xTaS₂に特有の構造 である。この結果は、両物質が類似の結晶構造を持 っているにもかかわらず、その電子状態には大きな 差があることを示唆するものである。

Ti は 3d 遷移金属、Ta は 5d 遷移金属であることか ら、両者の間ではスピン軌道相互作用(SOI)が大きく 異なることが考えられる。そこで、SOI の大きさを 変えた配置間相互作用クラスターモデル計算によっ て実験結果を再現できるかどうかを試みた。結果を 図2に示す。配位子に直接 SOI を取り入れることは



Figure 1: Fe $L_{2,3}$ -edge (a) XAS and (b) XMCD spectra of Fe_xTaS₂. Circles represent the different spectral features from the XMCD spectra of Fe_xTiS₂ [4].

困難であるため、この計算では、Fe の SOI を atomic な場合の1倍から10倍の範囲で変化させている。そ の他の計算パラメータは文献[4]と同様としている。 SOI を増加させていくに従って、Relative energy = -4.5 eV付近の上向きの XMCD ピークが成長してい く様子が見て取れる。これは、実験スペクトル(図 1(b))のhv = 706.5 eV付近の上向きの XMCD ピー クに対応していると考えられる。したがって、実験 で観測された Fe_xTiS₂と Fe_xTaS₂の間の XMCD スペク トル形状の差異は SOI の大きさの違いによって説明 できると考えられる。この結果は、ホスト層内原子 の SOI の差が軌道混成を通じてインターカレート原 子にまで及ぶことを示していると言える。

 Fe_xTaS_2 について、XMCD総和則を用いて面直方向 の軌道磁気モーメントとスピン磁気モーメントの比 $|M_{orb}/M_{spin}|$ を求めたところ、 0.61 ± 0.04 となった (面内磁場では 5 T の磁場を印加しても磁化が飽和 せず、 $|M_{orb}/M_{spin}|$ を実験的に求めることは困難で あった)。これは Fe_xTiS_2 の場合の値 (0.24 ± 0.04 [4]) に比べて有意に大きく、 Fe_xTaS_2 の非常に強い磁気異 方性との関係性が示唆される。

参考文献

- [1] H. Negishi et al., J. Magn. Magn. Mater. 67, 179 (1987).
- [2] M. Eibschütz et al., Appl. Phys. Lett. 27, 464 (1975).
- [3] G. Shibata *et al.*, Photon Factory Activity Report 2018
 #36 (2019).
- [4] G. Shibata et al., J. Phys. Chem. C 125, 12929 (2021).

* shibata.goro@jaea.go.jp



Figure 2: Simulated Fe $L_{2,3}$ -edge XMCD spectra based on configuration-interaction cluster-model calculation. Fe 3*d* spin-orbit interaction (SOI) is varied manually in the range of 1–10 times of its atomic value. Other parameters are set the same as those in Ref. [4].